

第3部 大国の復活と混乱

第1章 混乱と飛躍

1 日中国交回復と日本人の錯覚

中国は、文革の混乱が収まると、大国としての存在感に溢れ、周辺の国を心理的に圧倒する力を備えた。1973年に日中国交が回復すると、中国が近い将来、大マーケットになると予想し、直ちに、日本の大企業は「北京詣」を始めた。

私は当時日本長期信用銀行（長銀）に勤めており、1974年の初夏に、会長、頭取以下10名からなる訪問団の一員として北京に行き、中国人民銀行や中国銀行を尋ね、今後、長く取引したいという気持ちを伝えた。

当時、日本では、中国には、泥棒と蠅と雀がいない、また人民は精神的に満足していると言う評判が広がっていた。出発前に、長銀の同僚や学生時代の友人から、その点を確認してきてくれと頼まれた。

雀がいない理由は、13億人の人民が、ある日を決めて、雀が地面に降りそうになった時、一斉にドラをならして追い払ったので、雀はすっかりくたびれ果てて、墜落死したからだという。これは如何にも作り話のようであるが、それでも、毛沢東の中国では、有り得ることだと思った人が少なくなかった。

その頃は、日中間には直行便がなかったので、香港から列車で深圳経由で広東に入り、そこから国内便に乗った。確かに中国はすばらしかった。駅や空港には外国人専用の待合室があって、テーブルは真っ白な木綿の布でカバーされ、トイレには洗濯された手ぬぐいが吊り下がっており、貧しくても、清潔に生活しているように見えた。

棚には毛沢東やマルクス、レーニンの分厚い著作が並び、壁には「人民のために服務す」という毛沢東の書が掲げられていた。まるで大学の図書館か重要な会議室のような重々しい空気がみなぎっていた。

ホテルには鍵がない。蠅もいない。荷物は路上に置きっ放しにしてもなくなる。道路は昼も夜も青い人民服を着た人が、自転車に乗って、イナゴの大群のように職場や家路を急ぎ、若い女性でも化粧をしていない。街角の至る処に「毛沢東万歳」という巨大な看板が掲げられており、中国は素晴らしい国になったものだ。

日本では文化大革命を高く評価し、中国人民の精神が一変したと判断した知識人が少なくなかった。私も、この北京旅行でそう思い、中国は孔子が理想とした周の国に近づいたなと感じた。

しかし、後に、当時、中国では泥棒が多く悩んでいたということが、その時随行した中国人の通訳の話によってわかった。日本人の訪中団は中国には泥棒がいないと信じ切って、荷物を道ばたに置くので、団が街を移動する時には、数名の公安職員が見張りについた。

また、日本人が単独で行動しないように、集団行動のスケジュールをびっしり組んだ。単独行動を取る人には通訳を付け、日本人が直接中国人に接触できないように努めた。

中国に泥棒がないように見えたのは、当時、中国政府が入国を許可した外国人団体の質が高く、そのメンバーは厳重に管理されたホテルに泊まるからだった。

確かに蠅は少ない。それは、中国が貧しかったので、食事の余り物はなく、肉や魚の煮物はお湯をかけてすっかり食べ、蠅が集まる食料はなかったからだという。

文化大革命は内乱であって、親兄弟も敵味方に分かれたり、暴力で脅されて自己批判を迫られたりした人が多く、都会の若者は山深い農村に下放された。その過程で中国人の心は砕かれて何も信じられなくなり、心を病んだ大衆が、イナゴの群れのように無表情で、自転車を漕いでいたのだという。荷車を引き、天秤棒を担いでいる人もぼんやり顔だった。威勢がいいのは、郊外の道路脇の至る処にいる鶏、鶯、豚ぐらいであった。

日本の訪中団はすっかり騙された。中国政府は、彼らを特別扱いして中国の現実を見られないように仕組み、豪華な歓迎宴会や答礼宴会では「日中永遠」の平和を誓い合うという形式を決めていた。つまり、中国は、日本と経済的関係を深くして、将来、投資対象とするのに相応しい国だという印象を与えたかったのだ。

日本の訪中団を錯覚させるには、ホテル、公安のマンパワー、高級自動車（紅旗）、鉄道の特別席等の準備が必要だった。そのため、日本企業が訪中を申し入れてから、許可を得るには時間がかかった。ビザには旅行可能地が記載されていた。例えば、「北京市」であり、日中戦争が始まった盧溝橋までしか行けなかった。中国の大部分の地域への外国人の立ち入りは禁止だった。

2, ただ働きの栄光

私達は、中国側の「手厚いもてなし」に感謝した。私はその後、毎年何回も中国を訪問した。中国社会科学院や経済発展センターから、日本の長期設備資金の供給システム、国営銀行（開発銀行）の機能、株式会社制度等の解説、中国の農村における自由化政策、工業化政策、地域開発戦略等に関する意見を求められたからだ。

1970年代半ばから80年代にかけて、興銀、長銀、野村証券の調査部は争うように中国に出掛けて政策を提言し、日本語が上手な中国の官庁エコノミストを自社の調査部に外向させるように頼んだ。出張費用や出向者の滞在費はすべて日本側の負担だった。

有沢広巳さんや小宮隆太郎さんを始め、日本を代表する学者も、ほとんど報酬を受け取らずに中国で講義し、政策提案を行った。

何故、日本企業や多くの学者が、中国政府機関に対して経済分析や政策提案というサービスにのめり込んだのか。それは中国には、つぎのような魅力が存在していたからだ。まず第1に、数百年ごとに反乱と統一を繰り返しつつ独特な中国思想を維持し、現在、また強力な統一政権を建設した中国は、果たしてどういう国かを現地で実感したかった。彼ら

は、新中国が唐や明のような巨大国家に発展する可能性が大きいと考えた。企業は中国に無限のマーケットを予想し、まず人的関係を深めたいと考え、学者はしっかりした知的情報源と研究のパートナーを求めた。

第2に、有沢、小宮両氏の年代までの人は、旧制中学や旧制高校で孔子、孟子、墨子、荀子など紀元前3～6世紀頃の思想を学生時代に学び、また、第二次大戦後の15年間には、毛沢東の矛盾論や実践論を熱心に読み、中国では、3000年の歴史を通じて、西欧社会と全く違った不動の論理構成や倫理基準が確立している事実を認識し、「東風が西風を圧する」可能性を予想した。中国文化の影響下で歴史を形成してきた日本人として、新中国の建設と東風理論の進化にかかわりたかった。

第3に、中国国内における関係機関のサービスは行き届き、誠意に溢れているように見えた。講演、討論、訪問先機関、時間的スケジュールはきっちり決められていた。

中国と国交を回復した国のトップは、いずれも周恩来首相との和平交渉が終了後、挨拶のために毛沢東の住居を尋ねている。田中首相も、ニクソン大統領もそうした。毛沢東は天から世界を統治する命令を受けた皇帝であり、彼は不機嫌な顔でモスクワを訪問した以外、中国を離れたことがなかった。

私達はその毛沢東の国から定期的に招待され、中国側のスケジュール通りに行動し、制限された情報を持って帰国した。それは遣唐使の時代のように、ごく自然に名誉なことだと思ってしまった。

私は、北京の書店で私の著作が翻訳・販売されているのを見た。勿論、私の了解を得ず、印税も支払わない。それは不法な行為であるが、その時には、私の著作が文字の国、思想の国である中国の大きな書店の店頭にあることに感激し、興奮した。私にとって、中国はそういう「偉大な国」だった。

第4は、第二次大戦では、日本軍が中国に侵攻して、1000万人以上の中国人を殺害したことに対する贖罪感であり、ただ働きは当然だと思われた。

私達は、1970～80年代には、中国が世界舞台に華やかに登場したことに圧倒され、何の抵抗もなく、心を中国に吸い込まれていた。中国は、経済水準が低くても、偉大な存在だった。実際、21世紀に入ると世界第2位の経済大国になった。